大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

東野圭吾と大阪

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006060

東野圭吾と大阪

堀　江　珠　喜

大阪で生まれ育った東野圭吾がエッセイ集『たぶん最後の挨拶』(2007) で、江戸川乱歩賞に初応募したときの動機のひとつに「小説家になれば大阪に帰れる」ことを挙げている。ところが、いざ受賞し愛知の会社を辞めると、さっさと上京してしまうのだ。この決心について彼は朝日新聞 (1999年９月27日) で次のように説明する。

東京行きを決心したのは、私の小説を読んだある人の何気ない一言がきっかけだ。その人はこういったのだ。「あなたの小説には、なぜ具体的な地名が出てこないのですか」

土地を限定すると、その場所に馴染みのない読者はつまらないと思うからだ。という意味のことを私は答えた。しかし答えながら、私は自分に問いかけていた。ならば、これから一生、地名の出てこない小説を書き続けるつもりなのか、と。

地名を出す以上は、その土地のことを知っていなければならない。だがこの時点で私がよく知っている土地は大阪と愛知だけだった。これらの土地を舞台に小説を書けないことはない。ただし、題材はある程度限定されるだろう。何より登場人物には方言をしゃべらせねばならない。

登場人物には標準語をしゃべらせたい —— これが、私が東京に住もう、東京を知ろうと思った最大の理由ということになる。

「登場人物には標準語をしゃべらせたい」というのは、とりもなおさず作品を「全国区」にしたいという熱意によるものだ。さらに朝日新聞同年同月30日付けのエッセイでは「なるべく多くの読者に受け入れてもらうためには、場所を特定しないか、特定するならばそれは東京以外に無いというのが、長い間の私の考えだった。もう少しオーバーに、信念、といってもいい」と述べているが、確かに東京は全国区である。

いくら名古屋が元気で大阪に維新旋風が吹こうが、全国区にはなれない。唯一の例外は京都だが、それは東京のマスコミがことあるごとに京都を取り上げ続け、東京人のいわば憧れの古都になっているためである。つまり東京という全国区の人々が勝手に日本の心、日本人のアイデンティティーをこの町に求めて満足しているからなのだ。メディアが東京に一極集中しているので、たとえ大阪で有名になるにも、まずは東京のマスコミに注目してもらう必要があるくらいだ。そのようなメディアと物理的に距離の近い方が何かと便利で、デビューしたての作家が上京するのは当然である。東京ではフリーライターという身分でも生活するための仕事にありつける。従って、舞台を地方にしても東京圏で執筆するのが多くの作家のライフスタイルなのだ。

それほど意識的に東京にこだわる東野圭吾だが、その作品には大阪らしさがしばしばうかがえる。その大阪らしさとは、彼の「大阪弁」の使い方と言い換えてもいいだろう。

《大阪弁の笑い》

そのタイトルもまさに『浪花少年探偵団』(1988) について東野は「初めて大阪を舞台にして書いたが、大阪弁を文字化するのは意外に難しいと思った。また、大阪弁を使うと、最初はそんなつもりもなかったのに、自然とお笑い路線に走ってしまうのだった」と記している。確かにこの作品のヒロイン、しのぶセンセというキャラクターについては、宮部みゆきが解説で「しのぶセンセは、チエちゃんが大人になったときの姿」を絶賛している。チエちゃんとは、はるき悦巳の名作漫画『じゃりん子チエ』のヒロインである。「お笑い路線に走ってしまう」からこそ、しのぶセンセにファンがつき、そして宮部みゆきの分析通り、このファンとチエちゃんのファンは共通していると思われる。「足も速いし、口も早いが手も早い」と宮部は説明する。それほどに正義の味方のお転婆、いや、行動派で誰からも愛されるキャラクターなのだ。

竹内しのぶは25歳で独身、短大卒で大阪大路小学校の六年五組の担任教師という設定である。彼女の言葉はいつもベタベタの大阪弁だが、見合いの相手の本間が標準語でしゃべるのに見とれたりもするところが可愛い乙女である。チエちゃんがそうであったように、しのぶセンセも皆に愛される。ただし大人だから、恋心にも触れられるが、官能とはほど遠いさわやかな描かれ方であるのも人気の理由であろう。

学園ものは書くのが辛いと、このシリーズは単行本にして２冊めの『しのぶセンセにサヨナラ』で終わってしまった。しのぶセンセも年齢を重ねるのだから、作者ばかりではなく、彼女自身も年月とともに変化し、同じような話のヒロインには向かなくなってくる。しかしそのあたりは、あまりリアリズムを持ち込まないほうがいいのかもしれない。とくにロングセラーのミステリーの主人公はシャーロック・ホームズにしろ明智小五郎にしろ、歳を取らないのだから。そういえば、じゃりん子チエも変わらない。けれども、東野にはそろそろ大阪弁のお笑いによりかかった創作から脱却したいという気持ちもあったのではあるまいか。

それにしても絶妙な大阪弁のやりとりは、それだけで『じゃりん子チエ』的笑いを生み出す。たとえば次の「しのぶセンセを仰げば尊し」からの一節である。

「じつはなあ、センセに頼みたいことあるねんけど」
「あかん」
「まだ何もいうてへんで」
「聞きとうないからや。どっちみち、しょーむない頼みやろ。一日中ソフトボールさせてくれとか、給食にステーキを出してくれとか」
「あのなあ」と鉄平は唇をとがらせた。「僕、もうすぐ中学生やで。何が悲しいて、そんなしょーもないことを頼まなあかんねんな」
「けど、似たようなことやろ？」

「全然違うわ、あのな、じつはセンセに探偵やってほしいねん」

もしこれらが標準語で描かれていたらどうだろう。この漫才のような場面は出来上がるまい。いや標準語を東野が用いたら、このやりとりの大部分は省かれ「じつは先生に探偵をお願いしたいんです」の一文に集約されてしまうのではあるまいか。なぜなら本当に必要なのはこの一文であり、あとは大阪弁によってのみ活かされる「遊び」の部分だからである。このような箇所は『浪花少年探偵団』では散見できる。標準語でなら単に行数稼ぎでのらくらしたやりとりにしか読めない会話が、大阪弁によって見事に「お笑い」というエンターテインメントに化すのである。おそらくはストーリーそのものよりも、この類のやりとりを楽しめる者だけが、しのぶセンセのファンとなり、このシリーズを読み進めるのではあるまいか。改めて笑いを読者に提供する「大阪弁の力」を感じさせてくれるのが、これらの作品である。そして『怪笑小説』(1995) の「おっかけバアさん」も、大阪出身のシゲ子が大阪弁で考え、しゃべるからこそのお笑い系読み物となっている。この短編をすべて標準語に変換したら —— どれだけつまらなくなるだろう。いや、もともと読み物としてはいささか物足りない話の強烈な味付けに、「大阪弁」が使われているとは言えまいか。

《アホという言葉》

関西と関東では、いや大阪弁と標準語とでは「アホ」のニュアンスが大いに異なる。一般論として、前者では「親しみ」が込められているのに対し、後者では「バカ」よりも強い罵りと聞こえるらしい。そこで東野圭吾も、この点は大阪人らしく、つい「アホ」という言葉を用いている。

ただし現代日本の教育現場において、この言葉は禁句なので、他の登場人物が連発することがあっても、しのぶセンセはまず使わない。直接生徒に「アホ」というのは全シリーズを通して２カ所だけだ。まずは「しのぶセンセのクリスマス」でケーキを５人で食べようと切り分ける場面だ。

「まず円を六等分する場合、扇の角度を何度にすればいいか答えよ」
「なんや、こんなとこで算数の問題出さんといてえな」
「もう、明日から冬休みやのに」
鉄平は口をとがらせた。「ええと、全部の角度が三百六十度やから、六等分の場合は・・・六十度」
「正解。次、原田」(筆者注、関西と標準語とでは「ハラダ」のアクセントの位置が異なる)
「パス」
「パスはなしや。六等分の場合は六十度。では五等分の場合は？」
「五十度」

「あほ」
しのぶは左手で原田の頭を叩いた。

教室ではなく、しのぶに心を寄せる本間のホームパーティで、しかもしのぶと信頼関係を築いている生徒相手なので、彼女もこのような態度が取れるのである。また「しのぶセンセの上京」では、しのぶが国内留学中、鉄平と原田を連れて上京し、誘拐事件に巻き込まれてディズニーランドに行き、ホーンテッドマンションを出るや、二人に異常がないか尋ねる。

「なかったと思うけど」
「なんや、頼りない言い方やん」
「そんなこというても、こっちは幽霊見るのに必死やもん。センセ、仕掛けがうまいことできてたなあ。さすがに外人の考えることは違うわ」
「あほ、それどころやない」

これらの「あほ」は、極めて親しい間柄でのみ用いられる呼びかけなのだ。この大阪人の波長が東野のタイトルに表れるのが、『あの頃ぼくらはアホでした』(1995) である。東野はときによって「あほ」と「アホ」を用いるが、これらに特に論じるほどの違いはないと思われる。ただ、タイトルではひらがなの中にカタカナが混じるとその言葉に視覚的インパクトが生じるので、その効果を狙ったのであろう。

東野の中学時代のＴ教諭が「比較的うまく」ワル生徒たちとコミュニケーションをとるのだが、その態度は「あほ、ぼけ、カス、なにぬかしとんねん、という感じだった」とある。相手を罵倒しているようでありながら、これらの言葉が愛情に裏付けされているものであることは、彼の「性教育」のエピソードからもうかがえる。一般論としてワル生徒ほど動物的本能を残し、人を見抜く力、つまり教師が口先だけのきれいごとを並べているのか、本心から発言しているのかを感じ取る能力を有しているのではあるまいか？またワル生徒たちは、このような言葉が日常的に使われる世界で暮らしているから、教師からの少々の罵声には傷つかない。免疫力があるのだ。対照的に、優等生はショックを受け、「アカハラ」や「パワハラ」だと学校に訴えかねない。

だがさすがのＴ教諭も「バカ」とは言わない。関西で「バカ」はかなり強い罵りの言葉で、これに愛情は込められないのだ。「アホ」と「バカ」はまるで異なることを、関西出身作家の書き物を読むときには心得ていなければなるまい。たとえば東野は中学の文化祭で世代違いのビートルズ・ブームについては、「あるクラスでは、四人のアホ生徒が、モップを頭にのせ、箒をギターにバケツをドラムにみたてて物真似をしていた」と書く。この場合、「四人のアホ生徒」とは標準語では「四人の愛すべき愉快な生徒」とでも訳すべきなのである。

さらに、五教科のうち一つでも零点をとったら落ちるという推薦入試を心配するＹに、「僕」が「要するに各教科の合格ラインが百点満点でたったの一点」という意味のことを言う

と。こんな言葉が返ってきた ——「あほぬかせ。そら、ふだんの試験で十点でも二十点でも取ってたら、オレかてこんなに悩まへんわ。しょっちゅう零点取ってるさかいに、ビビっとんのやんけ。そこんとこ、わかったらんかい」

つまりは成績のひどすぎる生徒に、出来の悪くない「僕」が「あほぬかせ」と反論されるのだ。この場合の「あほ」はむしろ「途方も無いこと」を意味する。ちょうど中国の秦の始皇帝が建てた途方も無く大きな宮殿の名前を起こさせてくれよう。

さらに「恋に恋する合コン魔」では、合コンのあと、T木がひとりの女性に魅せられているのを知り、自分も彼女にアタックする気になる。それを聞くT木が「そんなアホな」。それについて東野はこう説明する ——「T木は呆れたが、そんなアホなことをするのが当時の僕だった。」そう「アホな」は呆れた気持ちを表すのであり、相手の頭が悪いという意味ではない。

また「アホ」が「バカ」を意味するのではないことは、予備校時代の思い出を書いたエッセイ「あこがれの慶応ボーイやでえ」で、自分よりレベルが高い浪人について語る様子からもよくわかる。そしてめでたく大阪府大に入学。そこで期末試験対策を友達と試みるのだが、頼りになるブレーンがいない。「だがそれも当然なわけで、ブレーンをやれるような奴等は、こんなアホなことには参加しないのである」と東野は書くが、懐かしさを込めて「こんなアホなこと」と言い、これになにかほのぼのとしたものが感じられるのだ。一方、本当に愚かしい事については、きっぱりと「馬鹿」という言葉を使う。中学時代、剣道部で休憩中の飲水禁止されたことについて、「現在こんな馬鹿なことをいう指導者はいない」と書いているのだ。

そして最終章は「アホは果てしなく」では、ミステリー作家の推理どんでん返しよろしく、「アホ」とは「賢い」の意味に逆転する。いや“fair is foul”（キレイはキタナイ）のようなシェイクスピア的レトリックといえるかもしれない。東野の体験から就職試験の合否についてこんなコメントがある。——「友人たちも続々と就職先を決めていったが、中には何度も落ちてくる者もいた。意外なことだが、そういう連中は成績優秀である場合が多かった。どうやら自信があるだけに、面接でも自分の主義を曲げることができないらしい」。つまりアホなことをしていた者たちが、賢い生き方を身につけていたということである。そしてN社に就職した東野は「数年後にアホなことをやらかして」と江戸川乱歩賞受賞について語るのだ。日本の文学界の中でも指折りの賞を受けたことが「アホなこと」なのだ。これからも、「アホ」なる言葉の東野の使い方が、国語辞典では理解できないほどの幅広い意味をもっていることがよくわかる。

さらに「アホ」を自称する行為には、大阪人独特のサービス精神とその余裕を裏付ける自信がうかがえる。2012年度の江戸川乱歩賞受賞作『カラマーゾフの妹』の選評で、東野は「原典『カラマーゾフの兄弟』もきっと面白いに違いない！」と述べている。東野の自伝的エッセイから推察するに、彼がこの名作をはるか前に読んでいそうにはない。しかし『カラマーゾフの妹』を審査するにあたり、目を通したか粗筋のチェックくらいはしただろう。読んでもいないのに読んだふりをするのが東京人なら、読んでいても読んでいないふりのできるのが大阪人である。あえて「東野って、あんな名作も読んでいないアホ」と思わせるこの選評からは、彼の

大阪人らしいサービス精神と自信が感じられるのである。

いずれにせよ大阪弁の「アホ」の意味は決して頭が悪いということに限定されない。標準語族には理解できないかもしれないが、おおらかで人情のこもった響きをもつ。国語辞典はどうあれ、実生活においては、「バカ」どころか、いいやつ、可愛いやつを指す言葉ですらあるのだ。

ついでながら人情といえば、この「アホ」に限らず、大阪弁は癒しの雰囲気も醸し出してくれる。『手紙』(2001-2002) で、直貴が兄の犯した殺人罪のために苦しい人生を歩まされるのだが、由美子は最初は親友として、やがて妻として、大阪弁で彼を励まし続ける。「ひどい話やね」—— このニュアンスの理解できる読者にとっては、ちょっと慰められる場面である。しかし、柔らかいことばには強さも込められているのだ。この強さがよく表れるのが、自分たちの子供、実紀についてきっぱりとこう決心するところだ。

「実紀のことはあたしが守る。この子には絶対に嫌な思いはさせへん。それともう一つ、あの子にはコンプレックスを持たせたくない。親が逃げ回ってたら、子供まで卑屈になってしまう。そう思わへん？」

もちろん「アホ」には自虐的な笑いを誘う効果もある。エッセイ集『ちゃれんじ？』(2004) の「おっさんスノーボーダー殺人事件」では、スキー場での殺人事件について作家と女性編集者のこんなやりとりがある。

「俺の名前をだしてもいいぞ。当代随一のミステリ作家が事件解決に協力してやるから、情報を寄越せというんだ」　「そんなこといったら、ヒガシノさんだけではなく、あたしまでアホだと思われます」

おそらくこの女性編集者も関西出身なのであろう。

《相手を巻き込む力》

トボケた響きを持つ大阪弁だが、実は相手を自分のペースに巻き込む力を秘めている。『ちゃれんじ』の「『レイクサイド　マーダーケース』を見てきました！」で、こんな一節がある。

「そうでっしゃろ。問題は撮影が終わった後、どうするかということですねん。本物の資材を使ってますから、このままどこかに建て直すこともできまっせ。ヒガシノさん、買いまへんか」

仙頭さんは大阪弁が特徴だ。その言葉遣いで物を売りつけられると、何となく断りきれなくなるから不思議だ。

この大阪弁の力が存分に発揮されるのが『幻夜』(2004) だ。この小説の第一部が『白夜行』(1999) といわれているように、後者のヒロイン、雪穂は大阪出身である。そこで刑事やその他の登場人物には大阪弁を使わせているが、ヒロインは大阪弁嫌いだ。子供のときから「汚い大阪弁を遣う人と話していると、うつらないように気をつけるのが大変」と言い、茶道の先生の標準語の言葉遣いを真似て、習得するのだ。この雪穂が成長して立身出世を果たし、余裕がでてくると、やっと大阪出身の従業員・浜本夏美に対しこのような言葉がでてくる ——「あたしもこっちに来たときぐらいは、大阪弁を使おうかな」 けれどもこの言葉も、おそらく標準語のアクセントによるものであったと思われる。だがその直後、雪穂は大阪出店の意気込みを、こう夏美に語るのだ ——「勝負はこれからやで」この言葉にこそ雪穂の正体が表れている。これは品の良い船場言葉ではなく下町の大阪弁である。雪穂の大阪弁はお世辞にも上品とはいえない。いや、品のいい関西弁を使う人々との交流が無い環境で育った ——だから関西弁より標準語のほうがエレガントな自分を演出しやすいのであろう。

いっぽう「エンドレスナイト」(1987) の関西出身の妻、厚子は、実父が大阪で商売に失敗し自殺した暗い過去を持つため、大阪を憎み、恐れている。従って大阪弁を使わない。夫の洋一を殺したのは、やはり彼も「大阪で商売を始めると、何かにとりつかれたように人が変わってしまい、大阪弁まで使うようになってしまったからだ。「なあ、早よ。渡してくれ」と夫はマンションの権利書を厚子に要求するときに言った。大阪で、実父のように夫もまた破滅の道を辿っていることを察知した厚子は、それを阻止するべく夫を殺す。この行為はすなわち大阪を拒否する、もしくは大阪から逃げることをも意味している。

その点、『幻夜』のヒロイン、新海美冬はもっとしたたかである。実に効果的に大阪弁を用いる。そして大阪弁の効果が期待できない、あるいは標準語が望ましいときには、その場に相応しい知的で品のいい標準語を話す。よく関西出身者は標準語を話すのが苦手だと思われがちだが、彼女はそんな苦手派の雅也にこう言うのだ ——「標準語なんか簡単やろ。英語やフランス語を覚えろというてんのと違う。日本語や。しかもテレビから毎日流れてくるんやから、いやでも耳に入ってくる。それを覚えていったらええことやないの」

特筆すべきは、美冬がこれを大阪弁で説得していることである。そう、彼女は雅也を支配するとき、必ず大阪弁を使うのだ。そして、雅也も彼女に抗うことはできない。弱みを握られているからという事実に起因するところも大きいが、それと同じくらいこの言葉に魔力があり、従わざるをえなくなるのである。彼女の言葉はサバイバルのための極意なのだ。阪神大震災直後、石油ストーブの灯油を求める被災女性に雅也は無料で分けようとする。だが美冬は20リットルで５千円を要求し雅也に囁くのだ ——「甘いことをいうてたら、生きていかれへんよ」

また雅也の叔父が瓦礫の下でもがいている場面のビデオテープを美冬は撮影者から騙しとり、雅也に渡す。これで彼の犯行を疑わせる証拠は無くなった。火葬場で遺体処理の話を美冬がまとめ、彼女は上京を提案する。

「東京？」

「うん、決まってるやろ」

何が決まっているのか説明は無いが、雅也はこれに逆らえない。さらにまったく土地勘の無い東京に行き、ますます彼は美冬の言いなりになる。それは彼が東京という異郷にあって、美冬だけが唯一の仲間だと思わされているからだ。この仲間意識は大阪弁によって成立を可能にしているのだ。そして雅也が不信感を抱きそうになると、このように静かに諭す ——「雅也.... あたしらは、きれい事をいえる身分やないねんで」

ここで注目すべきは、彼女が「静かに」言うことだ。悪魔はいつでも冷静な知恵者である。この物語では美冬の大阪弁は「悪魔の言葉」でもある。やわらかく、優しく相手の（雅也の）心に入ってゆき、自分の意のままに彼を操るのだ。さらに「正論」とも言えないような説明が彼女の大阪弁でなされると、奇妙に説得力を帯びるのだ。美冬が雅也に「女性」の扱い方と自己抑制について指南する ——「本能に流されて、セックスに支配されてほしくない。どんな時でも欲望をコントロールできる男であってほしい」。雅也が「美冬はセックスも人間を操るための手段やというのか」と尋ねると、こう言い切るのだ ——「当然やろ、そんなこと。自分の利益にならんセックスになんか何の意味もない」

また雅也に頼み事をするときも．二人の連帯意識を高める台詞が出る ——「きれい事をいうのはやめよ、雅也.... 二人で戦い抜いて行くと約束したやろ。周りは全部敵。あたしらが生き残っていくためには、お上品なことはしてられへん。あたしは大丈夫。雅也が味方でいてくれるかぎりは戦い続けられる。だから雅也.... あたしを裏切らんといてね」。こうして、雅也から「俺はいつでも美冬の味方や。絶対に裏切らへん」という言葉を引き出すと、「ありがとう、嬉しい」とキスをし、「ちょっと頼みたいことがあって」と用件を切り出す。男性美容師・青江についての調査を依頼するのだ ——「雅也、馬鹿にしたらあかんで.... この男の顔をよう見とき。あたしらの運命を変えてくれるかもしれん男や。あたしらにとっては金の卵を産む鶏かもしれん男やで」

いっぽう、この青江を食事に誘って新しい美容院の共同経営を持ち出すときの美冬は標準語でテキパキと語る ——「ただ上手なだけじゃ、これからの時代は生き残っていけない。客の心を摑む何かを持っていないとだめ。極端なことをいうと、客をとれだけ盲信させられるかが勝負の分かれ目なの.... いわば美容師そのものがブランドになる。そういう輝きがあなたにはあると確信したわけ」。そして「二人が力を合わせれば、きっとうまくいく」と青江に夢を描かせるが、この場合はビジネス・パートナーの域を出ない。その後、青江は美冬に愛されているものと勘違いすることにはなるが、美冬にとって青江は「金の卵を産む鶏」にすぎないのだ。ビジネスにおいては有り難い存在だが、探せば青江に替わる美容師がいないわけではあるまい。いや、その時点では見当たらずとも、才能のありそうな若い美容師をカリスマに育てることも不可能ではない。だが雅也の替わりは、まず見つからない。

従って雅也には、美冬は甘えを見せ、下手に出ながらも彼の心を操るが、青江の場合は資金を彼女が出すことで、より強い立場を保つのだ。いざ出店し、順調にゆきながらも青江が昔の

恋人への未練がましい態度を見せるや、美冬は冷たい口調でぴしゃりと言う ——「あなたにはまだわかっていないのね。今のあなたは昔のあなたじゃない。昔は捨てなさい。そうしないと勝負に勝てないわよ。あなた、勝ちたいんでしょ.... だったら.... ちらっとでも考えないことね。あたしを裏切るなんてことは」—— こう言いながら彼女はテーブルに並べられたナイフを手にし、その先端を彼に向けるのだ。これは静かな「脅し」である。

雅也に対しては、心中はどうあれ、「あたしを裏切らんといてね」と大阪弁で懇願する美冬が、青江には「ちらっとでも考えないことね。あたしを裏切るなんてことは」となるのだ。そしてこちらは美冬の本心であり、凄みを感じさせる。

概して他者の裏切りを恐れる者は、実は自分が「裏切り」を行っているものだ。過去の自分を知る曽我が現れるや、美冬は雅也を陥れる。彼のもとに叔父殺しの証拠写真を売りつける脅迫状が届き、美冬は素知らぬふりで「マクド」を土産に雅也を訪ねる。雅也には「マクド」と言うのも関西弁を用いるためだ。ファッション界に生きる青江とは高級レストランで食事をする美冬だが、雅也には「マクド」なのである。そこで雅也の（当然ながら）不安げな態度に美冬は力強い大阪弁で彼の心を摑む ——「何かあったんやろ。なんであたしに隠すの？あたしらは一心同体やろ。困ったことがあったら助け合うて誓ったやんか」

そして彼女の策略へと巧みに雅也を巻き込み、彼を安心させ、マクドを頬張るとこう言うのだ ——「雅也と一緒やったら、何を食べてもおいしい」。さらに「前からいうてるよね。この世は戦いや。あたしの味方は雅也だけ。雅也の味方はあたしだけ。生き抜くためやったら、あたし、どんなことでもする覚悟はできてる」と彼を洗脳し続けて「邪魔者」を片付けさせる。

その間にも美冬は着々と次の手を打ち、雅也に作らせた指輪で銀座の老舗宝石店・華屋社長の心をビジネスでもプライベートでも射止め、婚約にまで漕ぎ着ける。一ヵ月ぶりに音信不通状態で雅也を訪ねると、もちろん彼は不機嫌だし、婚約について「本気か」と問いつめる。ここで見事なのは美冬の大阪弁舌である ——「当たり前やないの。そんなこと、伊達や酔狂でできるかいな」。さらにこう説明する ——「あたしはあの男が好きなのと違う。あの男の妻という座が好きなんよ。好きなものを手に入れたいと思うのは自然なことやろ」

「そんなん.... おかしい」としか言い返せない雅也に、美冬はこうたたみかける ——「雅也、あんた、金のために結婚するのは動機が不純やとかいいだすんやないやろね.... ええ歳して、結婚に理想を求めてどうするの。結婚はね、人生を変える手段なんよ。世の中で苦労してる女を見てみ。みんな旦那選びをしくじってる。真面目第一とか、子供好きとか、そんな寝ぼけたようなことを結婚の条件にしてるからや.... 秋村さんはあたしのことが好きやし、あたしは秋村夫人という立場が好き。何も問題ないやろ.... 結婚したからというて、あの男のものになるわけやない。名字が変わるだけや。たったそれだけのことで、遺産の相続人と生命保険の受取人になれる」。

打算の結婚を正当化しているのだ。無茶な理論だが、大阪弁で言われると（大阪弁のわかる者なら読者であれ）説得されてしまいそうである。美冬はそう言いながらも雅也の気持ちを上手に汲み取って、こう断言する ——「あたしが本当に好きなのは雅也だけ。雅也もあたしの

ことを愛してくれてる。そうやろ？.... あたしらには結婚なんていう形式は必要ない。そんなものより、もっと強い絆で結ばれてる。あたしが結婚した後も、二人はずっと一緒や.... お願いやから割り切って。何の武器もないあたしらが世間を向こうに回して戦うには、こういう方法しかないんよ」。またしても「あたしら」を連発するのだ。こうして雅也の機嫌をとると、青江について相談を持ち出す。彼もまた美冬の婚約に怒っているのだ。青江と美冬の肉体関係についてわかっている雅也が「仕事上だけのパートナーやったら、寝たりはせんやろ」と皮肉を言っても、美冬は動じるどころか、「女が女の武器を使（つこ）てなにが悪いの？男かて、それは百も承知やろ.... そんな話はどうでもええの」と本題に切り替える。

雅也の協力で、青江を事件の容疑者にしておいて、美冬はこの美容師の窮地を救い恩にきせ、彼女は自分の実力を見せつける。感心する青江に美冬はこう言ってなおも青江に彼女の能力を認めさせる ——「人を動かすには、いろいろな方法があるのよ。お金を使うのは最低のやり方。お金で動く人間のことは信用しちゃいけない」。標準語での美冬は正論を吐くようである。少なくとも大阪弁のときのように無茶な理論で押し切ることはない。いや、それができないから相手を罠に掛けなければならないのかもしれない。無事に結婚してからも美冬は雅也に頼み事をする。義姉・頼江の弱点を探って欲しいというのだ。美冬は雅也を励ます ——「大丈夫、雅也やったら見つけられる。あたしが見込んだ男やねんから.... もし弱みを見つけられそうになかったら、弱みを作ったらええだけのことや、大したことやない」

「大したことやない」と大阪弁で言い切られると、「大したことやない」とこちらまで共感してしまうから不思議だ。雅也にしてもエスカレートする美冬の要求に心を痛めながらも、言われるままに彼女に協力してしまう。そして首尾よく頼江に接近し、ホテルのラウンジで会うことになった雅也に美冬はアドバイスする ——「面白くなりそうな気がするんよ。こう言う時のあたしの勘は、まず外れへん.... 明日、がんばりや。ちゃんと身なりを整えて、髪型もびしっときめていくんよ.... 五十でも女や。そのことを忘れたらあかんで」

すっかり頼江に気に入られた雅也に、美冬は電話で励ます ——「彼女に近づくことには成功したみたいやね。しかもかなり気に入られている.... 今日、頼江さんに会（お）うたんよ。一目見て、すぐにわかった。女の顔になってた.... ええか、雅也。ここからが肝心やで。でっかい獲物を釣ろうとしてるんやからな、絶対にしくじったらあかんで」。美冬の計画は、頼江の弱みを作る、すなわち雅也と不倫の事実を作ろうというものである。断る雅也に美冬はこう説得する ——「あたしも雅也にそんなことはさせたくないよ。けど、ほかに道がないんやから仕方ないやないの。何もかも二人が幸せになるためや。あたしが好きでもない男と結婚するのを、雅也は黙って耐えてくれたやろ。今度はあたしが耐える番ということ。雅也があんなおばさんを抱くのは辛いと思うよ。けど、あたしもあんな男に抱かれている。あたしらは、こうやって生き残っていくしかないんよ」。またしても「あたしら」同盟だ。そして最後は「いつものように」励ましの言葉で締めくくる ——「大丈夫。雅也やったら絶対うまくいく」。

こんな言葉遣いで下劣な行為をそそのかす美冬が、別の場所では老舗宝石店の社長夫人役を見事にこなし、また女性実業家として青江には標準語でまっとうなビジネス論を展開する

――「今の時代は売れているものだけが売れる。人の集まるところにだけ人が来る。とにかくトップにならないとだめなの。そのためにはどんな手段を使ってでも有名になること。通好みの店がはやるなんていう時代じゃないのよ。そんなのがうけるのは、庶民にも贅沢が許されてたバブル時代だけ」。確かに不況と言われながらも相変わらずエルメスの人気バッグ・バーキンのウェイティング・リストには多くの名前が並んでおり２年待ちは当たり前だとか。

さて美冬に裏切らないことを誓わせた雅也だが、結局は裏切られる。もっとも美冬には「裏切った」という認識はなかったかもしれない。見抜けなかったほうの自己責任くらいに思っていたのだろう。繰り返して言うが、雅也を操れたのは彼女の大阪弁の力によるところが大きい。米倉俊郎（実は曽我）を殺す計画を打ち明けながら、彼女はこう言う ――「あたしらは夜の道を行くしかない。たとえ周りは昼のように明るくても、それは偽りの昼。そのことはもう諦めるしかない」。ここでも「あたしら」が用いられて運命共同体、一心同体であることが強調されているわけだが、雅也が催眠術にかけられてゆくような状況がこのように説明されている。

> 美冬の言葉には強烈な説得力があった。魔力といってもいい。彼女が口にすると、どんなに恐ろしいことでも、それは避けて通れない道だと思えてくる。

そして犯行当日、電話で彼女は雅也に駄目押しする ――「雅也、迷ったらあかんよ.... やる時にはやる。あたしらが生き延びてこれたのは、そう決めて行動してきたからやろ」。「あたしら」という言葉は強い。しかしこの単語、いや美冬の雅也への言葉はすべて大阪弁であるからこそ魔力を秘めているのだ。『白夜行』では、いわば陰の世界の符丁として大阪弁が用いられていたが、『幻夜』では「悪魔の囁き」の言葉である。悪魔は決して自ら悪事を行わない。必ず弱い人間の心を操り実行させるのだ。これが悪魔の悪魔的所業であり、「悪女」もまた、この手法を用いる。『幻夜』の特異な点は、その悪女が下品な大阪弁で「手下」となる男（雅也）を思いのままに動かし勝利の女神がこの悪女に味方することである。（大阪の名誉のために断っておくが船場で生まれ育った山崎豊子の作品に見られるような上品な大阪弁もあるのだが、美冬のは下町言葉である。）

雅也の心を開かせ、そこに付け入るには雅也と同じレベルの言葉が最も有効だ。でなければ一心同体に感じさせられまい。しかも二人とも東京に出て来た。周囲は標準語という雅也にとっては外国に等しいところでの美冬の大阪弁こそ、愛の言葉に響いたに違いないのだ。このように東野は大阪弁の力の可能性を広げてくれたといえよう。

《大阪弁が消えた！―映像化された『幻夜』》

美冬は自分が婚約したときに「あたしが本当に好きなのは雅也だけ。雅也もあたしのことを愛してくれてる。そうやろ？」と言うが、特に雅也に「愛」の告白をした箇所はどこにもない。「あたしら」で一心同体が表され、二人で世間を相手に戦う同志である旨が大阪弁で語られる。これがすなわち愛の言葉として充分だったのだ。その証拠に、連続ドラマ化された『幻夜』

(2011) では、阪神大震災が中京駿河湾沖震災となり、登場人物から大阪弁が消えた。すると美冬の言葉遣いは雅也に対しても青江に対しても同じとなる。そこで雅也の心を摑むのに、美冬は「雅也、愛している」を連発するのである。ちょうど原作の美冬が「あたしら」を用いるのと同じようにだ。ちなみに映画『白夜行』(2011) でも連続ドラマ『白夜行』(2006) でも大阪弁が消えた。(後者では発端が布施になっているが、笹垣が神戸風だが変な関西弁を使い、雪穂の養母は京都言葉を用いるが、雪穂のしゃべりかたは標準語アクセントでもあまり上品とはいえない。おそらく脚本家自身の日常語に近い言葉が採用されたと思われる。) もちろん全国区作品 (商品) としてとらえれば、大阪弁によって視聴者が限定されないことが望ましいのだろう。だが、せっかく大阪弁の書ける作家が珍しく大阪弁の底力を表す小説を書けたにもかかわらず、映像化において、その言葉の魔力が消えてしまうのは、関西人としては淋しいというより物足りなさを感じ、ある種の怒りさえ覚える。しかし大阪弁でなくてもいいのなら、特に日本映画である必要もなくなる。もし邦画で大阪弁の効果が大事にされていたなら、韓国版『白夜行』(2009) も製作されなかったかもしれない。つまり「国際化」のために「脱大阪」は最初のステップだったともいえよう。文学作品にしても、海外での受賞を視野に入れるなら、英訳されても面白さが失われないことが必要条件となろう。大阪弁の効果に依存していたなら、文学の国際化は難しいのだ。

いっぽう連続ドラマ『浪花少年探偵団』(2012) では、このタイトルにある以上、大阪弁を使わないわけにはゆかないだろう。女優・多部未華子は小柄な体で前述「チエちゃん」の大人版のようなしのぶセンセ役を、元気な下町大阪弁でこなしている。ちなみに多部は、このドラマのＴＢＳ系列テレビ放送が始まる一ヵ月前、東京の新国立劇場の『サロメ』で主役を演じたが、「チエちゃん」タイプの女優はミス・キャストであった。あれは学芸会に特別出演した「しのぶセンセ」だったのでは？などと考えてしまう。それなら『サロメ』をパロディ仕立てにし、コミカルに描いてもよかったかもしれない。舞台であれ映像であれ、文学作品の視覚化は難しい。東野圭吾の作品の映像化については、また別の機会に改めて論じることにしたい。

Keigo Higashino and Osaka

Tamaki Horie

As an Osakaite, Keigo Higashino uses the Osaka dialect ("Osaka-ben") quite effectively in his works. Sometimes by using only a few words of Osaka-ben he creates a comical atmosphere. Reading the essays on his childhood and his days at Osaka Prefecture University, we laugh at descriptions in Osaka-ben of all his stupid behaviour. If these were written in standard Japanese, they would simply not be that funny. One case in point is the usage of "aho" which is special in Osaka. In standard Japanese it means "fool" only, but in Osaka-ben it can show the speaker's affection or the sympathy for the person they are describing.

Higashino , however, decided to make his characters speak standard Japanese as a rule, because he no doubt wanted to appeal to the wider audience in Japan. Certainly it is risky to use Osaka-ben or any other dialect, for only people who are familiar with these languages can fully understand and enjoy these works. Also, Higashino, after being awarded the Edogawa Rampo Prize, settled in Tokyo so that he can know and use Tokyo for the scenes where people usually speak standard Japanese. It is very natural for Japanese writers to live in Tokyo, for it is said that more than 90% of publishers including all of major ones are in Tokyo, and most of mass media are centered there.

Also as a mystery novelist, Higashino was worried about the fact that Osaka-ben tends to make the writing more comical. Unless he intends to write "manga" type mysteries such as the series of *Naniwa Shonen-tanteidan* (Naniwa Boy Detectives), he needs to be careful in his use of Osaka-ben in serious mysteries so as not to undermine their tone.

In *Byakuya-ko* (the White Night Journey), the heroine Yukiho, in spite of being an Osakaite , considers Osaka-ben dirty and indecent and speaks standard Japanese. Of course, elegant and decent Osaka-ben exists among upper classes of Osaka, to which Yukiho does not belong, and she has only ever heard dirty Osaka-ben during her childhood. She always aspires to be an elegant lady, so she learns elegant standard Japanese and lady-like manners.

In *Genya* (the Night of Illusion), the heroine Mifuyu cleverly uses Osaka-ben and standard Japanese according to the situation and her purpose. To Masaya, her shadow partner from the Kansai area, she uses Osaka-ben and always succeeds in persuading him to carry out her evil plans. Surprisingly with the power of Osaka-ben, Mifuyu can make Masaya believe that she loves him without the word of "love" a single time. In one sense, Mifuyu's Osaka-ben is the soft and gentle devil's language so that Masaya is easily tempted. There is no laughter but devilish one unlike in other Osaka-ben novels. Thus, Higashino proves the power of Osaka-ben in the mystery stories.